



旅は人 旅は人生

長谷川 正弘

京都の櫻

## 京都の櫻

この年の櫻は、東京だけが平年並みに開花しその後も順調に満開になっていったのですが、他の地方は東から西まで・南から北まで開花が遅く、一方で長くも楽しみました。3月の天気が悪く、朝晩の冷え込みも尋常ではなかったからか、例年ならやや遅めの櫻も散り始めると云う4月中旬に近い頃の或る日 京都に行き、わずか3日の間に7~8分咲きから満開そして櫻吹雪までを十分に堪能できたラッキーな歳であったと思います。因みに、このまま仕事を続ける限り櫻の頃には旅に出られないと思って来たのですが、櫻が開花を合わせてくれたのか実は結果として初めてその櫻の時期の旅になったのです。まだ早いのは承知の上で、遅咲きと言われている仁和寺の御室櫻(おむろざくら)も見に行ってみました。50株近くは優にありそうな内の1株が辛うじて花をつけていた程度でした。

特に順序や一筆書きのような効率を考えて決めていたわけでもなく、櫻の良さそうな寺社を3日かけて回ってみました。これまでの旅は歩き回ると云う感じで、盛んに「歩きに歩いた…」と書いてきましたが、此の回は櫻を求めての点の旅をしました。点と点を繋いだ物は、バス・地下鉄・そしてタクシー。ある意味、端から見れば櫻を求めて

忙かし気に飛び回っている追っかけのように見えたかも知れませんが、珍しく私が櫻に夢中になれたのですから、許して頂きたいのです…。

私は、思春期の頃からか或る時期まで、春先は何となく気分の悪い日が多く頭も重く(無論それで学校や仕事を休むようなことも決してなかったのですが…)、ましてや花見の酔客の騒ぎが耐え難く、春は嫌いな季節でしたし、桜も嫌いでした。そんな私が、この歳の京都の櫻には魅せられ、興奮して飛び回れたのですから、我ながら驚きであり、65歳を過ぎて、今更　これまでと違う自分を見た気がした次第なのです。

因みに、一言でいうなら、櫻にこれ程までにパットではなく、しっとりとした綺麗さもあるのだと思えたのは生まれて初めてだったと思います。それは雨のせいではなく、櫻とキッチンと向き合っている事ができる、気持ちの余裕が在ったのだと思います。何故なら…？

この旅で先ず感じたのは、京都人の花見スタイルの良さでしょうか。この事も、気を散らさず櫻だけを見られる環境を作ってくれたのだと思っています。私の自宅近くの京都管理下の井の頭公園(昨年5月1日は100周年記念日でした)などは、池を取り囲む古い櫻は見事ですし有名ですが、それに勝るすごさとして、花見客のマナーの悪さとそのゴミが挙げられる程、それはそれはひどいものです。以前、同行者の実家のある吉祥寺に引っ越したばかりの40年程前の頃は、この時期の南風に乗って

井の頭公園の花見客の賑わいと云うか騒音が夜中まで聞こえていたのを覚えています。最近では警察が介入して制限し、花見の宴は10時までともなっています。それでも管轄の違いか、ゴミの持ち帰りの指導はされておらず、日頃はゴミ箱もなくゴミの持ち帰りをアナウンスしているにもかかわらず、早朝散歩がてら花見に行くと、ブルーシートが桜の樹に引っかかって重そうにしていたり、巨大なゴミ捨てスペースからはみ出したゴミが、春の強風に翻弄されていたり、カラス軍団がむれていたり、居残った昨日が（=酔っ払いが）グダグダと意味不明な雄叫びを上げながら滞留していたりと… 何ともひどいありさまで、桜の頃には井の頭には行かない習慣が付いた程なのです。しかし、京都は歴史風致地区でもあり、花見にも強制されなくても在る、または強制に協力するルールが存在するらしいのです。例えば鴨川縁にも綺麗に咲き誇る櫻並木が夫々川面に向けて枝を伸ばしていますが、そこにブルーシートを広げる人の姿はないし、当然花見用特設ゴミ箱の用意もないのです。「京都で花見の宴が張れるのは、平野神社と醍醐寺の花見位…」と、タクシーの運転手さんは話していました。他には、円山公園茶屋周辺と原谷園内等…。平野神社・醍醐寺にも行って見る事ができましたが、無論多くの人出ではありましたが、少なくとも無闇なばか騒ぎは全く見られず、夫々に楽しんでいる姿に好感が持てました。無論、屋台が出て、緋毛氈を敷いた縁台も用意はされているのですが、昼間から盛り上がる様子もなく、夜の名残の酒臭い空気も感じられませんでした。全体として、清潔感のある

櫻を取り巻く雰囲気があったと覚えています。実は、関西弁もあまり好きではない私なのですが、賑わいの中のけたたましく無い関西弁、特に京都弁には癒され感さえありました。古来、花見は地元の方々の娯楽であり、観光客と云うより、地元の花見の花=櫻を汚さない誇らしげな多くの京都弁に交じった大阪弁の花見客も多い事を感じることができたのは何にも勝るものでした。こうした歴史風致地区を守る、地域や地方の方々の意識の高さは、近年富みに感じる処であり、尊敬に値する誇りのようなものを感じずにはいられず、関西弁が好きになれない等と言っている自分の小ささまで思い知らされた、京都の櫻でした。

さて実際の鑑賞先はと云うと、1日目は例によって前夜遅く着くので駅近の宿を取ってあり、朝一は歩いて行ける東寺とその中の御影堂をスタートとし、続いてタクシーで醍醐寺、そして地下鉄で戻り平安神宮、更にバスで清水寺。2日目は雨をつけて、駅からバスで1時間以上かけて上賀茂神社へ、そこからまたバスで戻って下賀茂神社、歩いて京都御所へ。1日中雨でしたが、京都御所など生まれて初めて、中まで入って見学しました。隣の仙洞御所は前回見学しましたが、京都御所がこんなに簡単に見学できるようになっていること自体を知らなかった私でした。修学院離宮や桂離宮は見学予約が必要だし、いつも一杯の印象があるのに、同じく予約の

必要なはずの仙洞御所は、当日行き当たりばったりで入れて説明を聞きながら見学できたし、京都御所に至っては、定期観光バスのルートにもなっている様な…、ちょっと意外であっただけに雨の日サービスみたいな気がしました。そして雨の京都、決して嫌ではなく、冬の雨も初夏の雨も春先の雪さえ…四季を通じて雨・雪体験してきています。生活している方々は兎も角、我々観光客はそれも楽しま(め)ないと、折角の旅が勿体無くなります。そお、山でも同様でした。ピーカンの絶好日和だけを求めているではかえって動けません。この状況では素人が聞いても遭難するよね〜と云う状況でないならば、行動あるのみと停滞(雨の日、行動せず幕営のまま過ごす一日…停滞数日は想定内で、食料も余分に運んでいる。この事について実は懐かしい追加の話があるのだが…) 好きの皆を叱咤したのをよく覚えています。私は、シットリ雨の稜線を傘をさして歩くのが大好きでした。ですから今でも私はいつも行動用バッグ(通勤バッグでもありますが通勤バッグとしては意外と行って帰って置いていることが多い)に広げるとやや大きめになる折り畳み傘を入れているのです、安心して雨の日も楽しく歩ける様に…。3日目は、雨も昨夕にはなんとかあがり、バスで平野神社へまらず行き、タクシーで最近有名な原谷苑へ、続いてタクシーで仁和寺へ、食事を済ませて東のはずれ慈照寺(銀閣)へ、銀閣から哲学の道を歩いて南禅寺へ(永観堂も寄るつもりでしたが、4時でCLOSE)。南禅寺では、歌舞伎で有名な石川五右衛門の「あいや絶景かな絶景かな」の名セリフを吐かせる三門に上り、私も櫻の絶

景を見物。方丈庭園は今回も時間切れで入れませんでした。タクシーで駅に戻り夕食を済ませ、ライトアップの東寺の枝垂れ櫻の見物を締めとしギリギリ予定通りの夜の新幹線に乗り込み、帰りました。東寺から始まり、東寺に終わった櫻の京都でした。

さて、私の拙い文章でイメージして頂けるか自信はありませんが、少し夫々の印象を書いてみましょう。

東寺の櫻と云うとまず有名なのは、入り口付近にある巨大な枝垂れ櫻。ライトアップのメインもこれです。特に夜のそれは、五重の塔方向から見ると、何故か生き物のようにも見え、卑近な例としては探照灯に照らし出されたゴジラを彷彿とさせられるような…、ですから最初に自信がないと書きました。要するに、それだけ例を観ないほどの高さも幅もある大きな枝垂れ櫻と云う事であると同時に、何だろうあの動きのある感じは…？ 風も吹いていましたが…。金堂・講堂の前に池がありその池の周囲と五重塔へ至る東の参道には、池と反対側にも櫻が植えられていて、櫻のアーチに囲まれて五重塔に導かれる感じで、緑の頃も悪くはないのですが、永い1年の中の此の一瞬を見られる贅沢と云うものを感じずにはいられませんでした。何だか、勝手な想い込みですが日中、大日如来さまも心なしか華やいで見えたのは、春の光のせいなのでしょう。御影堂は現在改修工事中で養生囲いが立派ですが、その脇にはおそらく例

年通りに紅枝垂れが満開であったり、古い吉野桜も花開いていました。此処は現在信仰形？の東寺の一部（塔頭の一つ）で、現在の近隣・地域・地方の信者の信仰と祈りの場になっています。東寺については、何度か書いてきましたが、嵯峨天皇から弘法大師空海に下賜された寺であり、真言密教の根本道場として崇え、今日では東寺真言宗の総本山となっているようです。

そして久々の醍醐寺。太閤秀吉の醍醐の花見は有名ですが、それだけに信者の櫻の寄進も多く、奥の方まで寄進された櫻が漸次成長していて、醍醐の花見が未永く楽しめる様に、自らの記念や祈念と共に人々の楽しみや喜びも祈っている様に思えました。因みに、醍醐寺は真言宗醍醐派の総本山です。西の東寺・東の醍醐寺いずれも京都の町の中では大きなお寺の方であり、古くから伝わる由緒正しい真言宗のお寺でもありますが、双方とも立派な五重塔があり、多宝塔でないのは何故等とも思いはしましたが、奈良を思わせる雄大な寺の風情があると以前から感じています。その名の通り醍醐天皇の祈願寺でもあったそうです。さて櫻はと云うと、最初やや小さめの総門がありそこに枝垂れ櫻が植えられており、花見客を迎えてくれますが、ここで驚いたり感激したりして写真なんか撮り出したら、いつまでたっても核心に至らない感じでそこはそこで通り過ぎ、その総門を潜ると遥か次のなる仁王門へ至る漠然と広く踏み固められた舗装されていない道が、三宝院の白い塀と靈宝館の白い塀に左右を挟まれる感じで在り、その沿道両側に櫻が植えられているほか、靈



宝館内の周囲に植えられている櫻も塀越しに見あげられ、来た者をいきなりを圧倒します。この時期は三宝院か霊宝館の券売所で全体の入場券を買わないと入場できないようで、立札をちゃんと見ない私は仁王門まで行って戻らざるを得なかったのです。普段は、夫々に券売し、選択の余地がありますが、花見客には全部を売って「全部の櫻を見て！」と云う事の様でした。前回は例の病み上がり？でもあり、本体である下醍醐辺りを先に見て、三宝院は後から見、霊宝館は割愛し次に予定していた隋心院へ急いだ記憶があります。花見の季節はなぜ？とは思いましたが、それもそのはず、三宝院にも立派な枝垂れ櫻をはじめ庭園にも紅枝垂れがあり見頃でした。前述の通り下醍醐にも幔幕に仕切られた参道の両側に雪洞や櫻があり、今回も割愛した上醍醐はもっと櫻が良かった様ですが、特に霊宝館内庭園には多くの枝垂れ櫻や櫻の古木があり、霊宝館の宝物見学をスルーして櫻だけを楽しむ人も多く居た様でした。流石、醍醐の櫻、醍醐の花見と言われて来ただけあって、花見客を満足させるに十分な見事な櫻が沢山在り、私も本当に満足できた思いがしました。特に、霊宝館内の櫻は、よくある霊宝館のイメージと大きく違って、或る意味 意表を突かれた感じで、感激でした。入ったからにはではありませんが、一応霊宝館内にも入り見学させていただき、途中大窓から見える枝垂れ櫻に気を取られ、ついカメラを構えたらいきなり管理の女性に叱られたりもしました。すぐ傍に休憩室があり、そこでは外の櫻を写しても良いそうで、私が叱られた場所は通路であり、立ち止まっただけ

ないと云う事の様で、申し訳ございませんでした。さてその靈宝館を出ると目の前に塀に囲まれた雨月茶屋のある一角があり、時間も時間だったので入ろうかと思いましたが、当然のように混んでおり、周辺塀の内側には屋台も設置されており、それらの屋台を覗き定番の焼きそばなどが用意されていたので、それを縁台でゆっくり食べました。ここからも、櫻は見えるし、実は駐車場に非常に近い、ですから一応敷物などを持ち込んだ人も、荷物の運び込みにも近くて便利だし、何か花見客にも小さな心配りがある事に、感心しました。要するにこの塀で囲まれたエリアは、宴を張っても良い場所の様でした。おなかも丁度良くなったところで、歩いて東西線の駅まで行くことにし、歩きました。途中から、見覚えのない桜の植えられた遊歩道のようなものができており、駅へと誘ってくれました。駅も以前は道路脇に出る感じの所謂地下鉄通路風でしたが、今や地下鉄駅ビルが2棟も並行に建ち、迷子になりそうになりつつ歩いた以前の田舎風又は造成地風な面影はありませんでした。しかし、昔と言っても長い病欠になる直前か、完解した直後ですから、7～8年しか経っていませんはずですが…、変われば変わるものです。

ついでに、何時かどこかで書き残したかった一言。京都市営地下鉄東西線と云いますが、最初に乗ったこの時に気が付いたのは、始発の太秦天神川駅から蹴上駅までは確かに東西に走る線ですが、蹴上駅からは南下し醍醐などを通して六地藏駅まで南北に走るの、何で東西線なのとの思いがありました。

因みに、南北に通っていて烏丸御池駅で東西線とクロスする市営地下鉄の路線は、南北線とは呼ばず烏丸線と呼ばれていますが、それは烏丸通の下を走っているからです。路線名の付いた歴史・理由などを調べると、面白いこと色々発掘できるのかも…、等と思った次第ですが、その後暇もなく行動せずに過ごしてしまったことも事実でして、言うは易く行うは難しであります。

さて、その京都市営地下鉄東西線に乗って向かった先は、東山駅から北へ歩いて15分の平安神宮。神宮背後周囲三方向一帯が神苑(南神苑・西神苑・中心苑・東神苑)となっており、広大な庭園が造園されていて、特に入ってすぐの南神苑には多くの枝垂れ櫻が花ほころび、観光客を楽しませていました。ここまで来ると流石に花見客と云うより観光外国人が多く目につきました。無論、他の神苑にもソメイヨシノかオオシマザクラかヤマザクラかヨシノザクラかが所々に在り、春らしい景色を演出していました。途中、臥龍橋と云う飛び石が池に渡してあるところがありましたが、外国人の女の子が何だか妙にピョンピョン跳ねながら渡っていて、ちょっと心配かなと気になった大人数名が見ていた中、案の定最後の石で足を踏み外し、頭まで一回潜ってしまったのを見ていました。日本が嫌いにならなければいいが…、等と余計な心配をしたりしました。泣く彼女を父親が笑いながら抱き上げていました。私は此処の泰平閣が好きですが、多くのフランス人ツアー客に占領されていて残念…、所々ちょっとかなりの混雑でした。枝垂れ櫻の南神苑の南の外れには、日本で一番最初に営



業運転された路面電車がかなり傷んだ状態で安置されて居り、私は当然毎回のことですがしっかりカメラにも納めましたし、見もしました。

次に、市営バスで向かったのは、清水ロバス停からぐんぐん上って、清水寺でしたが枝垂れ桜が無いせいか、其れとも此処だけの現象なのか、やや開花が遅く盛り上がりに欠けていました。無論そんなことにお構いのない外国人観光客は、怒涛の如く押し寄せていましたが、我々の今回の目的は「京都の桜・京都で花見」ですから、清水寺はさっさと後にしました。ちょっと疲れたし…。しかし今想えば、円山公園までは行くべきだったのかも…。円山公園の真中の枝垂れ桜、昔々 子どもたちがまだ小さい頃一度見たことがあり覚えています。

二日目は雨。エコ清掃のマークをドア外に貼りだしたこともあり、清掃の方も来て頂けちゃったし、兎に角宿を出てバスに乗るかと言う事になりました。

先ずは、よく行く上賀茂神社(賀茂別雷神社=かもわけいかづちじんじゅ)に行きました。東西の通りを縫うようにジグザグに洛北へ向かうので一時間以上かかりましたが、想定外の京都市街見物ができました。雨の日はこれもありだなあ～などと思いつつ… 到着。一の鳥居から、二の鳥居までの広々とした参道の右側に櫻が集中して植えられてありました。一番手前に大きく広く枝を垂らした櫻が赤々とあり、背景の吉野櫻が白々と幕の様に並び、引き立てているようでした。雨の中、結婚式にも出会いました。芸能人の〇〇が此処で式を挙げて以来増えている…、みたいな話が京都弁のおばさんの口から漏れていたりしました。今日は雨、ツアー観光客も足早にバスに戻り、居るのは地元の方が多く、京都駅のバスターミナルで見える限り、観光客は水族館か鉄博か美術館か…。境内には櫻は1本しかなかったし、檜皮革の屋根の葺き替え工事中で養生囲いが若干景色を邪魔していましたが、思いの外ゆくりと既に何度か拝観しているのにも拘わらず櫻を視野に入れながら、見て回りました。

次は再びバスで戻り、下賀茂神社(賀茂御祖神社=かもみおやじんじゅ)へ。バス停からの道は神社への最短であり、一・二の鳥居を潜らず・手も洗わずに本殿前へ出る感じで、まずはお参りを…。実はここへ来た理由の一つは同行者が二人の孫にお土産として或るものを買って帰りがかったからでもありました。それは、一日数

量限定？で売っているらしい、根付またはストラップの様なもので、本殿のお社それぞれの門前両側に控える青と緑色の阿吽の獅子を模った物でした。私も以前貰いましたが、何か私とは別の動きの中での拘りの様で、実は私はその緑と青の狛犬も今回初めて言われて認識した次第で、何度も来ていたのに、何で… って想いにもかられました。

下賀茂神社の櫻は、西の脇から入ったのではみられないようでした。境内の櫻は井上社(御手洗社)前の御手洗池の端にありました。御手洗池に花卉が散り始めていて、花筏が綺麗だな〜と傘越しに眺めました。しかし実は、糺の森(ただすのもり)側から入って来ればすぐ分かる事だったのですが、要するに表参道を採れば二の鳥居(南口鳥居)の朱色を一層引き立てるように、その手前少し離れた所に、大きな櫻が一株在り、鳥居と重なって見えていることは、お社を出る時に気が付きました。鳥居を潜った外に当然お清めの手洗い場があり、さらに縁結びの神の相生社が在り、さざれ石があり、その向こうに休息処「さるや」があり、一休みして糺の森を帰ることにしました。雨しきりで止む気配なし。タクシーで二条城へとも思いましたが、都合よくタクシーも来ず、何となく二条城方向に雨の中歩きだしました。結果、京都御所と同志社大のあいだの今出川通の歩道の御所側を西に向けて歩いていました。

そこで、何となく京都御所にも寄る事になりました。ここにも櫻が在ると何かに書いてあったらしいので…。或る意味偶然だったと思います。しかも、特に探したと云う訳で

もなく、車道脇の歩道よりずっと空気も景色も良いはずの、雨の御苑に吸い込まれ、また今出川通に概ね並行して玉砂利の道を進んでいくと、やがて左側に御所の塀が現われ、その真中へんにある朔平門の辺りから右手奥に櫻が見え始めました。ちらほら傘が動くのも見え、奥へ広がりのある大きな櫻園であることが分りました。西の外れは児童遊園のようになっており、近隣の子どもたちが利用しているのですが、今日は雨、櫻を見る人もまばら…。かなり育った枝垂れ櫻が何本も植わっており、古くはないが2〜30年以上の成長はある櫻が伸び伸びと上下左右に広がっていて、環境の良さを感じました。ただ、この雨、何処を歩いてもグチョグチョ、ぬかるむと云うよりしっかり踏み固められた遊歩道は川になり、そこを避けて植え込みに逃げるとびっしょり濡れた雑草が…。それも覚悟の上で来た人は飽くまで眺め歩いていた。やはり日本人は春を知らせる櫻が好きな様な気がします。そして、素直に櫻を喜べる自分が居たことに気付き、人並みになったことが嬉しかった…。また皇居とか御所とかにも抵抗感のあった私ではありますが、雨のせいも歳のせいも、まったく拘りなく其処の櫻そのものを楽しむ自分が居ることにも驚きました。因みにこの枝垂れ櫻の一角は近衛邸跡だったそうです。さて、児童遊園地まで進むと概ね御所の北西の隅に来たことになり、皇后門の向側にある乾御門の向こうに南北に通る烏丸通を走る車が見えて来ました。進路を直角に変え南に進み再び御所を囲む玉砂利の道を右手に時々現れる櫻を見ながら、雨のせいもあり、かなり低く枝を伸ばす櫻を同行者は香りを楽し

んだり花を見たり…。一方左手清所門へちらほら人が雨の中急ぎ足で吸い込まれていくのが見え、気になったが、アッ入れるんだ～って感じた瞬間、我々も吸い込まれていました。持ち物は皇宮警察官により簡単にチェックされ中に入れ、あとは自由。修学院も仙洞御所もグループごとに説明者が付き、inからoutまで付き切りな感じでしたが、ここは野放し状態、説明を聞きたい人は時間を待つが、そうでない人は三々五々好きに回れました。紫宸殿前南庭に右近の櫻左近の立花がお約束の様子在りましたが、右近の櫻が咲いているのは平安神宮も含め初めて見られたことで、お雛様のそれが現実のものとなった感じでした。御所はかなり立派な状態で保存されて居り、守られたんだな～って実感しました。東京大空襲で皇居が守られた以上に本土上陸と云う戦争の中、京都を外すってことは逆にすごい統制力だったと思わずにはられませんでした。これは或る意味日本人が守ったのではありません、日本人は国の歴史を守るってことまで頭に入れず戦争を始めました。原爆は落とされましたが、守るべきものは守ってくれたのです。前述の通り最近の国の歴史を守る意識については、京都の櫻でも理解できましたが、逆にそうであっても戦争への恐ろしいほどの流れが起こったら止められないって事を常に認識しておくべきと改めて覚悟した次第です。櫻は鳩と並んで平和の象徴でもあると思います… そんな櫻に、誓いを新たにしました。御所内には右近の櫻の他は櫻は殆どなく、一通り回った最後、出口近くの各建物に囲まれた裏手にあたる広いスペースに植えられていました。雅やかな朱の紫宸



殿以外の御所はわび・さびに徹したムードで櫻は合わないのかも… って感じました。言い方を換えるならば、あたかも時の止まったかの様な此処のシチュエーションの中で、四季の移ろいを表す櫻は合わないのでは… と思え、櫻は常盤(ときわ)ではなく移ろいゆくものを表している様に改めて感じられました。

さて、思いの外靴の中も濡れ、足から冷えた同行者はギブアップ。この日は一旦宿に引き上げ、体を乾かして夕食には改めて出ることとしましたが、夕食に出る頃には、薄日も射すほどに回復し始めていました。



最終日、冒頭に前振りした通り、まず平野神社へ。

前回来た時は全く人が居なかったのですが、一つ先のバス停で降り向う途中で見た景色は櫻に誘われ吸い込まれていく人々の流れ、びっくりしました。櫻も人も咲いてました。ましてや、昨日の雨、満を持しての今日の花見です。西大路通側から入ると云う事は、平野神社的には裏から入る感じで（正面は西大路通と真反対の東、北野天満宮方向を向いている）、境内までの道は櫻もさることながら、屋台が建ち並んで居り、昨日の雨で濡れた縁台と敷物を干したり花弁を払いながらの準備中、今夜のライトアップは賑わいそう… 等と想像がつく、ワクワクする時間でした。

一応と言っただけですが並んで参拝し、あとは一本一本櫻を見て回りました。花の神苑があり、そこにも櫻があり見ていると、近くの小学生がなだれ込んで来ました。その神苑には随所に小学生の櫻の絵も飾られており、それを見がてらの花見であったようでした。

続いて、原谷苑に向かいました。ここは作られた私有地で花見の宴OK。広い敷地内の中心には予約者用のガラス戸を締められて暖も取れる宴席もあり、その隣には売店もあって各種豪華弁当（結構いい値段する）等もあり、予約のない人は外に設けられた縁台や長椅子に座って喫食できるようになっている。紅枝垂れの原谷園で売っている、お花見テーマパークとでも言うか、ここまでくるとちょっと我々の櫻ではないな… って感じました。無論確かに見事な櫻ばかりの農園でしたが（村岩農園）

どうしても意図的で商業主義的な嫌らしさを感じずにはられませんでした。それに昨日の雨で結構グチョグチョで、傾斜地でもあり滑りそう…！しかし、帰宅して撮った写真を見ると、遠景など紅やピンクや白や黄色や緑がフワ〜ッと全体を彩り、春らしい描写…いいなあ〜と思えるいい仕上がりになっており、下手くそでもそれなりに綺麗に写る演出が造園上、為されているのだと改めてその仕組まれた美しさを実感した次第です。



次は、「咲いてないと思いますよ～」と言われて尚行った、仁和寺。

要するに咲いていないと言われたのは、御室櫻(おむろざくら)と云われるもので、中門に入ってすぐ左手に『御室櫻』と彫った石柱がありその一角にやや背の低いな櫻群があって、これを特に『御室櫻』と呼んでいる様です。この桜は元々が遅咲櫻で、この年のような状況では当然咲かない感じで、因みにその年は4月23日で五分咲きとかの情報がありました。冒頭で紹介しましたが、この日は、無数にある株の一株しか花を持っていませんでした。背が低いのはその下に岩盤があるからという説があった様ですが調査の結果はその下が粘土層であったとの事で、説が間違っていたと云うより、粘土層であっても似たような条件にはなるそうで、要するにその櫻が育つに必要な酸素と養分が少ないと云う条件になるようです。

一つ気になるのは奈良に、御室山(三室山)と云う山に在る御室櫻と仁和寺のそれとの関係が解らない事でしたが、仁和寺の御室は宇多法皇が出家後仁和寺西南の場所に御座所を設け永く住み続け御室御所(おむろごしょ)とも呼ばれており、その御室(おむろ)がその櫻に名付けられたとの説もあると云う事で、特に相互関係はないと云う事になります、何せあちらはみむろでこちらはおむろですから？そして、仁和寺の櫻はこの御室櫻群だけではなく、それを外して考えたらある意味ちゃんと櫻、咲いていました。ここも何度か来ていますが、中門入ってすぐのこの場所は灌木の林ぐらいにしか感じていなかったし、この日も中門を潜って「あ～咲いているじゃない…」っ

て思えたほど、他の櫻は咲いていたのです。例えば正面仁王門裏にも染井吉野が咲いており、中門前にも咲いており鐘楼前には枝垂れ櫻が咲き誇り、金堂や五重塔前にも染井吉野他が競い合って咲き誇っていました。これも帰って写真をチェックしましたら、御室櫻園で、御室櫻群が四角いエリアで囲われたその周囲の遊歩道の外周に一株離れて咲き誇る染井吉野を収めてあるのを発見、御室櫻のいい時期を知らない私は本当に仁和寺のその他の櫻に魅了されていたのでした。そしてここは真言宗御室派の総本山、きちんと礼拝しました。

門前でゆっくり昼食を済ませて次に向かったのは、コースであり今回最後の櫻、一気に東に飛んで、慈照寺から哲学の道を琵琶湖疎水沿いに歩いて、南禅寺まで櫻の中を歩きました。慈照寺門前は人が群れていましたが、兎に角坂を登って慈照寺へ。無論櫻の頃は初めてでしたが、以前書いた様に外していただけに、何れにせよ久しぶりでもあり、坂道の参道も「こんなだったかな～」とも思う程でした。しかし、庭園は造園出来立ての頃来たので、こんな感じて覚えており、昔と少し趣が変わった事を体が知っていました。櫻は殊更植えたと云うより以前からあったと云った風で、敢えて見せる様に移植した風はなく、少し控えめにも見えました。そう、櫻って目立ちますから、見せたい目論見でもなければ、他の木々に隠れているのも悪くないと感じました。しかし、実はアングル的には良い所に咲いており、これぞ造園の力と云うものを感じま

した。坂の参道を下り、哲学の道へ左折。琵琶湖疎水沿いにはかなり古い櫻も並んで植わっており、花吹雪、花筏を楽しむことができました。ここはさすがに外国人や観光客も多く、人の波でしたが、夫々の適当なところで消えたり、現れたりして、それぞれのコースで楽しんでいる様で端から端まで歩いているのは日本人でここを歩くのが好きな人の様でした。永観堂については前記の通りですが、これまでさほど気にせずに来た若王子神社、櫻も咲いていたので初めてと思えるほど久しぶりに入ってみました。この神社は哲学の道の南のスタート地点でもあり、櫻のない季節はやや奥まって埋もれた感じでありましたが、櫻が咲くと人を誘うと云うか、何とはなしに引き込まれる感じでした。裏山には櫻園も出来ているようでしたが、明日からのこと(仕事)も考えると、これ以上は無理と判断し先を急ぎました。

そのまま歩いて、南禅寺。永観堂に振られ、東山中学校・高等学校の前を抜け、哲学の道の流れで北側から東脇に回り込む様に、中門を潜らず三門に直接アプローチ。実は慈照寺もそうなのですが、前夜「京都の春」をテレビで特集しており、見た影響もあって、そこで出た話題を拾い、それなら行ってみようみたいな乗りで、三門にも上って見たわけです。石川五右衛門ではないですが、三門上から見下ろす境内の櫻、なかなかの絶景でしたし京都の町も春の光にモヤッと輝いていました。南禅寺の櫻も殊更櫻が在ると云うより、四季の樹木や常緑樹(特に松の老木は見事)に交じって櫻が在るという感じで、山のような自然が演出されているのを感じることができ

た。奥に回って水路閣を見、法堂と方丈の間を通り再び桜のある参道を三門に向け下りつつ、夕日の朱色が櫻をさらに彩っていた風景を堪能しました。

予定的には今回の櫻を求めた京都の旅はこうして終わりました。この日一日の暖かさと日差しで3日前は7~8分咲だった櫻は移動している内に満開となり、個体差の中で散り始めるものもあり、哲学の道に至っては、殆どの櫻が散り始めている状態で、繰り返しになりますが3日間を通し7~8分咲から満開そして花吹雪の櫻と、こんな絶好の瞬間瞬間に京都に居られた偶然と京都の櫻を守る人々に感謝せざるを得ませんでした。

駅に戻り夕食を済ませ、お土産を買う予定だったのですが、夕食中に「東寺のライトアップ、見ない」と誘い2時間ほどの余裕のある中、チョッと宿に戻り、預けてある荷物から上に着るものを引っ張り出して着て(一日中いつも通り半袖ポロシャツですごしていましたので)、時短のためタクシーで東寺に向かいました。東寺門前まで来て気が付いた延々長蛇の列、一寸想定外 何と入場するのに並ぶのでありました。既に券を持っている人もいるし… やや心配にはなりましたが、要するに6時半開場に並んだ人の尻尾が列になっていたようで、割と流れて入れました。予定的には滞在時間30分程度、7時半には宿に戻ってガラガラを受け取らないと、新幹線に…。しかし、時間のことなど忘れてしまいそうに綺麗で見事でしたのは前述の通りです。東寺のライトアップで締めたのは正解だったと今でも思っています。良い思い出のしめ

くりになりました。ライトアップと云うと何かミーハーっぽく感じてはいましたが、こんなに皆で由緒あるお寺でライトアップの櫻を共有できるなんて、流石弘法さんだなと思えました。因みに、別の時は東寺で弘法市を見て歩きましたが、雰囲気良かったと感じましたが、庶民を引き込む法力、櫻や市に感じられる弘法大師ゆかりの寺であり、商業主義的な香りとは違う引き付けられる力(魅力)を改めて感じた次第です。無論それは醍醐寺でも感じたことでしたが…。無論、寺社の再興の為等の一時的商業主義が悪であるとは思っていませんが…。



さて、「久良岐 花だより」は平成 27 年 4 月号の『櫻』をもって終了させて頂きましたが、「旅は 人 旅は 人生」も今回の『京都の櫻』を以って散らせて頂きたいと思います。拙い文章で、とくに飽きられているとは感じつつも、書き続け来てしまったことお詫び致します。因みに私も、昨年既に 70 歳を超え、作文だけが仕事の様になって居り、子どもと真剣に真向勝負で向き合っている、若き福祉人たちに後ろめたさを感じるに至りました。奈良をあまり書けなかったのが心残りではありますが、取り敢えず、このシリーズも此れにて終了させて頂こうと思います。そうしないと、次の行動が起こせませんし… けじめです。

誠に有難うございました。

